

## 中国と台湾の日本哲学研究

張 政 遠

### 一 はじめに

「日本哲学が世界哲学をリードすることができるか」を考える前に、まず「日本哲学が海外でどのような展開をしているか」を問いかけたい。しかしながら、日本にとって「海外」は決して英語圏だけではなく、他の言語圏も視野に入れることが必要不可欠である。

二〇〇四年に南山大学で「海外における日本哲学の展開」というシンポジウムが開催され、後に「Japanese Philosophy Abroad, 2004」とその和訳である『日本哲学の国際性』(二〇〇六年<sup>②</sup>)が刊行された。同シンポジウムのもう一つの目的は、Japanese Philosophy: A Sourcebook という出版企画について打ち合わせることであった。「完成には二、三年を要するはずである」と予想されたが、出版されたのは二〇一一年であった。<sup>③</sup>

空海から柄谷行人まで一五六人もの哲学者・思想家を原著(部分)の英訳と共に紹介している。「日本哲学を世界の共有財産にしていこうと、画期的な一冊といえる」と報道された。<sup>④</sup>

早速、同年一二月に香港中文大学では「Japanese Philosophy as an Academic Discipline」というシンポジウムが開催された。『資料集』の刊行を祝うのみならず、これからの日本哲学の国際化に向けて真剣に議論を行った。言うまでもなく、同年三月に東日本大震災が起こったばかりで、日本哲学・思想の真価が問われたときだった。

### 二 香港、そして中国と台湾

さて、「中国と台湾の日本哲学研究」という発表にもかかわらず、先に香港での日本哲学研究を紹介する理由は、私が香港出身で(東北大学留学を経て)香港中文大学で勤務しているか

らである。香港には日本哲学の研究者が皆無だったが、同じく香港出身の林永強（当時香港教育学院所属。以下、敬称略。）と一緒に日本哲学の脱鎖国化を考えていた。香港は立地の良さから国際会議に適した場所であり、特に中国・台湾からの研究者の呼びやすさもある。実際、「Envisioning Japanese and Chinese Philosophical Potentials in 21st Century」[International Conference on Nishida Kitaro] などのシンポジウムが行われ、隣のマカオでも昨秋、京都学派についてのシンポジウムが行われた。シンポジウムは論文集刊行のきっかけになるだけでなく、研究者の輪が広がると私は確信している。

この十数年間、天津南開大学の劉岳兵、香港城市大学の王小林、広州中山大学の廖欽彬などの研究者たちが多くの実績を出しているが、教育現場では日本哲学の一次文献の翻訳がまだ不十分であった。台湾出身の廖欽彬が中山大学哲学科で教鞭を執って以来、多くの日本人研究者を中国へ呼び、そして京都学派の中国語翻訳プロジェクトを立ち上げる実績があるから、彼こそ中国語圏における日本哲学研究の旗手だといっても過言ではない。なお、彼は二〇一九年の夏より一年間ほど日文研の客員研究員として来日している。

英語圏の研究成果を活用すべく、二〇一五年に劉と私は『資料集』の中国語翻訳プロジェクトを発足しようとしたが、二〇一七年には香港中文大学にて Conference on Japanese Philosophy: Sourcebooks for Teaching and Research が開催

れ、翻訳チームが結成できた。翻訳の人材を求めるならば、中国に視野を広める必要性を改めて感じた。

中国の日本哲学・思想の研究に関しては、「中華日本哲学会」という学会があり、毎年年次大会を主催している。「中華日本哲学会」のメンバーは主に日本学・日本思想を研究するものであるが、近代日本哲学・現代日本思想への関心も強い。また、「中日哲学フォーラム」という団体もあり、それは日本哲学会と中国社会科学院哲学研究所が共催する哲学的学術交流である。ちなみに、昨年の九月に「中日哲学フォーラム」が広州中山大学にて開催された。

台湾の学界においても、この十数年、日本哲学への関心が高まっている。台湾大学高等研究院・台湾師範大学の『臺灣東亞文明研究學刊』の特集「Japanese Philosophy in the Global Perspective」(2012)を皮切りに、台湾大学の『東亞文明』叢書には多くの研究本が出版されている。例えば、『日本倫理學與儒教伝統』という本においては、頼住光子の論文「和辻哲郎の思想の根基」も収録している。また、中央研究院では「京都学派と新儒教との対話」という研究プロジェクトがあったが、進行中の研究プロジェクトとしては、廖と私が参加している「日治時代における台湾哲学」というプロジェクトであり、それは一八九五―一九四五年の間に台湾人が日本語で書いた哲学的論著を読み直す作業である。

最後に、林と私が編集する『日本哲学読本（戦前編と戦後編、

全二巻』（聯経、未刊行）について簡単に紹介したい。「読本」というのは、言うまでもなくテキストを提供するものであるが、膨大の著作・論文からどういったテキストを選んでいいのが問われるわけである。編集の方針の一つは、いわゆる京都学派の哲学者たち、すなわち西田幾多郎（一八七〇―一九四五）、田邊元（一八八五―一九六二）、高橋里美（一八八六―一九六四）、九鬼周造（一八八八―一九四二）、三木清（一八九七―一九四五）と和辻哲郎（一八八九―一九六〇）のテキストが欠かせないものとして、収録したことである。その理由は、「日本哲学」の代表的なものをできるだけ網羅したいということにある。ただし、「日本哲学」と「京都学派」とを同一視するつもりはない。したがって、西周（一八二九―一八九七）、福沢諭吉（一八三三―一八六四）、中江兆民（一八四七―一九〇二）、大西祝（一八六四―一九〇〇）、いわゆる近代日本哲学の黎明期のテキストも積極的に取り上げたのである。一九四五年六月七日に西田は終戦前に病死したが、何人かの戦前生まれの哲学者たちは戦後まで生きぬいたのである。例えば、西谷啓治は一九〇〇年に生まれ、一九九〇年に逝去したのである。また、戦後になって多作の哲学者であるとも言えよう。『日本哲学読本戦後編』では、以上の事情を配慮し、彼が一九八二年に書いた「空と即」を戦後編に収めることにしたのである。

「戦後の哲学」というのはいわゆる「現代思想」としても把握できるが、その全貌はなかなか窺えることができず、テキス

トを選定する作業は至難の業であった。数多くの「哲学」や「思想」が点在する中、すでに鬼籍に入った四人の哲学者たち、すなわち井筒俊彦（一九一四―一九九三）、大森莊蔵（一九二二―一九九七）、廣松渉（一九三三―一九九四）、坂部恵（一九三六―二〇〇九）、および現在も活躍している五人の哲学者たち、すなわち柄谷行人（一九四一―）、上野千鶴子（一九四八―）、鷲田清一（一九四九―）、野家啓一（一九四九―）、高橋哲哉（一九五六―）のテキストを取り上げている。なお、枚数の関係上、竹内好（一九一〇―一九七七）、鶴見俊輔（一九二二―二〇一五）、吉本隆明（一九二四―二〇一二）などのテキストを割愛せざるを得なかった。『日本哲学読本』の読者には、ぜひこの限定した「テキスト」から「日本哲学」の無限の可能性を感じてもらいたい。

### 三 グローバル化する日本哲学

以上、中国語圏（香港・中国・台湾）における日本哲学・思想について簡単に紹介したが、グローバル化の時代においては、国境を越えた研究も注目しなければならぬと思われる。近年、私は多くの研究者たちと一緒に『*Journal of Japanese Philosophy*』（SUNY Press）や『*Tetsugaku Companions to Japanese Philosophy*』（Springer）などの企画を立ち、また『*Globalizing Japanese Philosophy as an Academic Discipline*』と<sup>(9)</sup>いう英文論文集を編集し、刊行させた。

国際会議に関しては、International Association of Japanese Philosophy が二〇一八年の真夏に北京で開催された「World Congress of Philosophy」の会期中に日本哲学のセッションを開催し、注目を集めた。また、より狭い分野での研究者の輪ができていく。例えば、国際高橋里美研究会が発足している。日本哲学を発信する土台の整備は確実に進んでいる。また、広域研究ネットワークに関しては、ヨーロッパにおける日本哲学のネットワーク (European Network of Japanese Philosophy) が発足し、バルセロナ・ブリュッセル・パリ・ヒルデスハイムなどで年次大会を開催している。ENOJJPの特徴としては、それはヨーロッパの学者だけの集いではなく、アジア・アメリカからの多くの学者も自由に参加できることにある。昨年の大会は真夏に南山大学で開催された。

東アジアの研究ネットワークについては、関西大学文化交渉学教育研究拠点(CIS)が運営する「東アジア文化交渉学会」では、日本学の研究者が多く集まっているが、近年、日本哲学・思想の発表も増えている。また、東アジア哲学の専門誌『*Journal of East Asian Philosophy*』の発刊と国際組織「International Society for East Asian Philosophy」の創立の動向に注視すべきであろう。歴史や言語の問題で出遅れた東アジアの研究者の輪をさらに強化しなければならない。

#### 四 おわりに

本稿では日本の伝統思想を含む広い意味での「ニホンテツガク」を意識的に用いた。日本の思想・哲学は日本の文化の一環として、「ニホンテツガク」が海を渡って各地で展開しているのが事実であり、「日本に哲学なし」という主張はもはやできなくなっている。グローバル化の流れの中、日本哲学が海外に進出することがますます多くなると予想されるが、行き過ぎた研究現場での英語公語化の危機を乗り越え、大学教育の空洞化に飲まれますといれば、世界哲学をリードできるように思われる。

- (1) Heisig (ed.), *Japanese Philosophy: Abroad*. Nanzan Institute of Religion and Culture, 2004.
  - (2) ハイジック編『日本哲学の国際性』世界思想社、二〇〇六年。
  - (3) Heisig, et al (eds.), *Japanese Philosophy: A Sourcebook*. University of Hawaii Press, 2011.
  - (4) 『読売新聞』二〇一・七・二五。
  - (5) 蔡振豊・林永強編『日本倫理学與儒教伝統』台湾大学出版中心、二〇一七年。
  - (6) Chung and Lam (eds.), *Globalizing Japanese Philosophy as an Academic Discipline*. V&R Unipress/NTU Press, 2017.
- (ちょう・せいえん、日本哲学、香港中文大学講師)